

1 親子の居場所事業

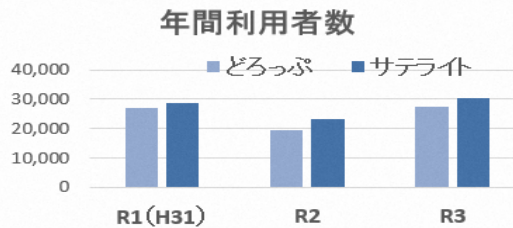
目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・親子の居場所以外での親の課題やニーズを把握し、来館者対応に生かす必要がある。 ・受付システム(システム変更が必要)やアンケートを用いて、継続利用者の実態把握をする必要がある。 ・どろっぷにつながっていない層へのアプローチ ・平日利用できない層へのフォロー	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		A	A
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		B	B
④親(養育者)自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

年間利用者数	R1 (H31)	R2	R3
どろっぷ	27,069	19,287	27,374
サテライト	28,512	23,136	30,510
合計	55,581	42,423	57,884

年間新規登録者数	R1 (H31)	R2	R3
どろっぷ	899	678	806
サテライト	897	814	942
合計	1,796	1,492	1,748



年齢別利用者数	R1 (H31)		R2		R3	
	どろっぷ	サテライト	どろっぷ	サテライト	どろっぷ	サテライト
0歳児	4,881	5,332	3,434	5,218	4,719	5,516
1歳児	3,899	4,107	3,359	3,718	4,572	5,429
2歳児	2,727	2,607	1,417	1,655	2,297	2,379
3歳児	1,605	1,703	1,035	752	1,085	1,615
4歳児	580	860	470	442	749	560
5歳児	278	396	147	214	431	363
6歳児	114	186	59	55	101	70

コロナ感染対策における開館状況 (令和2年度)

- 6月 予約制(午前・午後入れ替え)5組
- 7月 上限20組(ひろばでの飲食不可・開館時間30分短縮)、個別相談の再開、
- 8月 上限20組(ひろばでの飲食不可・開館時間30分短縮)、サポーター活動再開
- 9月 上限25組(ひろばでの飲食不可・開館時間30分短縮)、ボランティア活動再開
- 10月 上限30組(ひろばでの交代制での昼食再開)

1 コロナ禍での居場所づくりと安心して過ごせる工夫

* 感染への不安からひろばを利用せず、人込みを避けて公園などで過ごす親子も多くなった。安心して過ごせるひろば運営を心がけ、予約制から段階的に開館、利用者を巻き込みながら感染症対策などの環境整備を行った。来館につながりにくい層へはSNSでひろばの様子を伝えたり、スタッフが地域の公園等にアウトリーチし、親子の声を聴いたり声をかけていくことによって、情報提供や初来館のきっかけづくりもできた。

2 プログラムのオンライン化と利用者が先輩となる体験活動の実施

* 「両親教室」では感染への不安のある方でも参加できるよう、コロナ禍を契機にオンライン化を進めたことで、体調不良の方も自宅から参加できる利点があった。オンラインでは難しい体験の場の確保として、ひろばで個別体験ができる案内を参加者全員に郵送したことで、関心をもってもらい来館につながった。他の利用者が先輩家庭として、妊娠期家庭に産後の生活についてアドバイスする等、利用者間で交流できる機会となった。

* 日常のひろばと各家庭とをオンラインでつなぎ、演奏や読み聞かせなど交流の場に自宅から参加できるように設定することで、柔軟で利便性の高い交流を促進した。

* 妊娠期家庭が参加できる「ちょこっと育児体験会」において近隣の保育園と協働でオンライン講座を行い、「出産準備プログラム」では育児グッズ作り等を通して先輩家庭との交流を促すことによって、初産や第2子以降など多様な子育て状況に合わせた交流・支援体制のプログラムの設定を行うことが出来た。

* 「あっぷっぷ」(2~4か月の第1子対象のプログラム)は拠点以外での近隣の地区センターで開催することで、拠点から離れた地域の親子も参加でき、拠点の未利用者に対してもきっかけ作りの場として提供できた。

様式1-1 地域子育て支援拠点事業評価シート

3 コロナ禍でも多様な人が来館できる場の創出

- * 日曜日に地域で過ごす場所の開放として、就労家庭がより利用しやすいように、平成30年度から両拠点で隔月1回ずつ日曜開館を実施している。就労家庭が多く来館し、育休中の家庭に保育園生活の経験を共有する等交流が進んでいる。
- * コロナ禍では、ひろば内での活動を控えるシニアボランティアも増えたが、オンラインや電話連絡等で、つながりや関係づくりを絶やさなかった。コロナ禍においても活動の場を継続し、庭の手入れや散歩の付き添いなど外での活動を増やすことで、シニアボランティアが安心して活動することができた。
- * 在宅勤務となり自宅で過ごす人が増えたことにより、地域でボランティア活動を始めたいとの問合せも増えた。このような機会を好機として捉え、希望者に向けた活動一覧リーフレット「DOORS」を新たに作成し、自分の特技や強みを活かした活動につながる裾野を拡げることができた。
- * 2年間、開催できなかった地域交流イベントを自治会町内会やボランティア等の協力のもと、令和3年度に、開催期間や形態を変えて開催した。区内地域作業所の物販先がないことの課題解決の一助になればとの協力の輪が広がった。サテライトでは、イベント開催中にオンラインを活用したことで参画の場を拡げることができた。
- * 就学後の家庭向けの食を通したつながりの場として継続してきた自主事業「たべ〜る”ば”」の実施が難しくなったため、ひとり親家庭に向けて月1回食品を配布する「シェアねっと」を実施。民生委員・児童委員をはじめ、地域の方が食品などの寄付を申し出て協力してくれたことによって、間接的ではあるが地域の方の想いや支えを感じてもらえる機会ともなった。

4 ひろばでの一時預かり事業（ひととき預かり）の開始

- * ひろばでの一時預かり事業（ひととき預かり）が始まり、申込予約をシステム化することで利用者がアクセスしやすい環境を整えた。理由を問わず、1時間から利用できる預かりがあることで、来館目的が明確になり、初来館のきっかけとなった。養育者が他人を頼る経験、子どもは家族以外の人に愛着を持って関わってもらえる経験ができたり、ひろば全体で見守る預かりを実施することができた。

評価の理由(区)

- ①家庭訪問や乳幼児健康診査で地域子育て支援拠点の利用を積極的に周知した他、実際に拠点に出向き、利用者の状況を確認した。令和元年度より実施しているウェルカム「こうほく・にんしん・あんしん」キャンペーンでは、拠点等の地域の子育て支援の場へ出向きやすくなるよう「子育てグッズの引換券」を渡して、妊娠期からのきっかけづくりを行った。妊娠期からの切れ目ない支援のために、両親教室を拠点のほか、地域ケアプラザ等身近な地域で開催した。
- ②障害児、多胎児、ひとり親、サポートが必要な家庭に対しては、地区担当保健師から利用を促し、必要に応じて同行したりするなどして、拠点の利用につなげている。今後保育園と連携し、0歳児の居場所づくりも実施し、拠点に来ていない層にもアプローチしていく。
- ③区・拠点定例会（以下、定例会）や利用者支援定例会等で、拠点利用者のニーズや地区担当保健師が把握している地域のニーズを共有したり、毎年4か月児健康診査時の妊娠中から産後についてのアンケート（以後「4か月児健診アンケート」）を実施し、ニーズ把握に努めている。把握したニーズから、事業の見直しや事業立案、地域支援をよりの確に検討できるようにしていきたい。
- ④拠点で行われている養育者同士の交流や人材育成の取り組みについて、定例会等で意見交換し確認している。今後、父親支援や第2子以降の養育者支援等、港北区の課題に合わせた支援や事業展開を一緒に考え、実施していきたい。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・共働き世帯が増え、土曜・日曜来館への利用者ニーズの高まりによりに日曜開館を実施した。共働き世帯の利用者が先輩家庭として経験談を伝えることで、他の利用者と相談・課題解決し合う機会を作ることができた。
- ・ウェルカム「こうほく・にんしん・あんしんキャンペーン」と両親教室を実施することで、妊娠期家庭と親と子のつどいの広場とのつながりを作った。横浜市助産師会、地域ケアプラザ、地域子育て支援拠点、親と子のつどいの広場の多職種が協力して、港北区全体で妊娠期から迎え入れる取り組みができた。
- ・オンラインの活用により、コロナ禍においても、プログラムを実施することができた。また、日常のひろばでの交流もオンライン上で在宅家庭と双方向のやり取りを通してつながることができ、孤立化を防ぐことができた。
- ・感染対策を徹底し、またひろばでの親子の様子をホームページやSNSを通して利用者に加え区民に伝えることと、滞在時間が短くなったが利用者同士で譲り合いながら利用してくれたことで、来館者は減少しなかった。
- ・外国につながる家庭向け、「のびのび月ようび」などのプログラムを実施することにより、配慮の必要な養育者と子どもが同じ境遇の仲間や先輩家庭とのつながりを通して利用しやすい居場所にすることができ、継続した支援につながった。
- ・ひろばでの一時預かりの実施により、一時預かりの利用者がひろばでの他者との関わりや遊びの経験を通してひろばにつながるきっかけとなり、地域子育て支援拠点を利用する選択肢が増えた。

(課題)

- ・「4か月児健診アンケート」、「どろっぶ利用者アンケート」などの調査結果を、支援関係者に加え利用者とも共有することで、事業に活用していく。
- ・共働き世帯への支援として、保育園入園前や入園後の家庭に向けての取り組みを実施することで、生活ステージが変化しても戻れる場としての発信を強化していく。
- ・多様な利用者ニーズへの対応はまだ不足している。価値観や家族のあり方など多様化している利用者のニーズに対応していくため、利用者の背景理解に加え、知識とスキルが必要。
- ・感染予防を図りつつも、子どもが遊びこめる居場所としての機能の充実を図る。

振り返りの視点

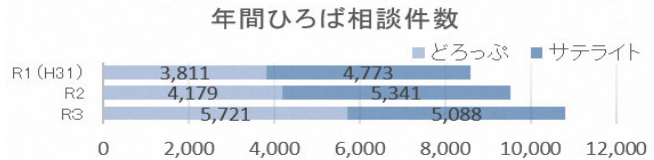
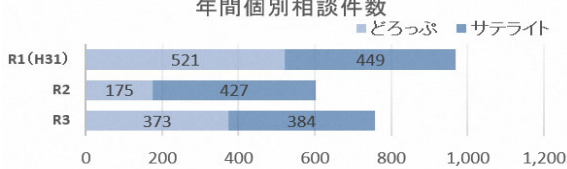
- ア いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
- イ 居場所を訪れる様々な利用者(養育者、子ども、ボランティア等)の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
- ウ 多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
- エ 養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
- オ 把握されたニーズを区子ども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- カ 子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
- キ 子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気づき、学ぶ機会を提供する場となっているか。
- ク 養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

2 子育て相談事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・人との関わりを持つのが苦手な親、また集団に入るのが苦手な子どもも多く、それらのフォロー。 ・「産後うつ」の相談が増えてきているので、その受け止めとその後のひろばへのつなぎ ・多機能を生かした相談支援	B	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができています。		B	A

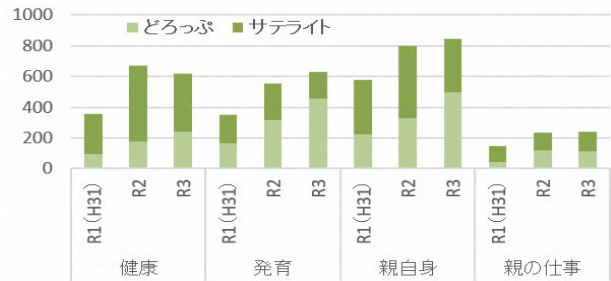
評価の理由(法人)

(主なデータ) ※1) コロナウイルス感染症拡大防止によるひろば休館時(R2.3~5)、個別相談は電話相談を中心に行った
 ※2) 個別相談の件数には、専門職が関わるプログラム時の相談件数も含まれる



項目別相談件数

	健康			発育		
	R1 (H31)	R2	R3	R1 (H31)	R2	R3
どろっぶ	96	176	243	163	318	454
サテライト	263	493	375	188	238	175
	親自身			親の仕事		
	R1 (H31)	R2	R3	R1 (H31)	R2	R3
どろっぶ	224	328	494	45	118	110
サテライト	355	471	353	104	114	130



1 拠点の利用有無にかかわらず、つながるための選択肢を増やす

* 自粛生活により気持ちの発信までも止まらないように、臨時休館中の玄関口に様々な工夫をした(誰でも書き込みできるノート・掲示板を設置する等)。ひろば利用に至らない方々が相談につながるための機会づくりに注力した。

* 公園まわりなどアウトリーチをし、何気ない日常会話から傾聴し養育者に寄り添うことで、相談と意識していない日常的な困りごとや気持ちに対しての情報提供や資源紹介を行った。出会いがきっかけとなり、その後の来館や相談にもつながった。

* 相談問合せメールやオンライン個別相談は、件数としては多くはないものの、心理的・環境的に来館が難しい方にとっての選択肢となり活用されている。初回のコンタクトが取れたことで、信頼関係への一歩となり、その後もオンライン利用や来館につながり、継続フォローができています。相談問合せメールは、開館時間外の受信が多く、相談者のタイミングに合わせて、受け入れることができた。

* 相談を入口とした一時預かりの情報提供、利用調整が即時に対応できることで、拠点利用につながり、継続見守りや信頼関係が築きやすくなった。

2 当事者のエンパワーメントを意識したグループ支援、ひろばへのつながり

* ひろばでの利用者の声から、「40歳代の会」、「20歳代の会」、「1歳児前後の会」などを実施。同じ思いを抱えている人の存在を知り得たことで、ひろばへの愛着が生まれ、場への参画意識が高まった。

* SNSの情報だけではなく、対話による当事者間のつながりが自身の悩みの解決に必要であることを利用者自身が感じることで、拠点利用の動機づけにつながった。また、その場にボランティアや先輩家庭にも参加してもらうことで、専門知識に加えて、多様な生活モデルに触れ、自己選択、自己決定する必要性の認識が芽生えた。

3 利用者対応に活かす相談の振り返りと専門機関との連携

* 多機能になってきたそれぞれの事業を利用する親子の姿に対して、職員間の共通理解を深められるよう、振り返り・カ

様式1-2 地域子育て支援拠点事業評価シート

ンファレンスの持ち方を工夫し実施。日常的な情報交換が密になり、継続的、かつ柔軟な対応につながった。

* 相談内容が幅広くなってきたため、横浜型医療的ケア児・者等コーディネーター、面会交流支援団体、マザーズハローワーク、地域ケアプラザなどの情報交換や連携を深め、相談者へのつなぎを行った。

* 保育・教育コンシェルジュ出張相談会や両親教室など、専門職との連携開催によるプログラムは、年間を通しての振り返りを行うことで、全体的な相談傾向の把握・共有をするとともに、今後の方向性を議論する機会となった。なかでも、両親教室に関わる関係者との振り返りは、「4か月児健診アンケート」も含めた分析結果を3か年共有し、産後うつの予防も含めた事業実施の連携を深めている。

評価の理由(区)

①乳幼児健康診査や母子訪問、赤ちゃん会などの際に地域子育て支援拠点において、気軽に相談できることを紹介し、必要な場合は保健師が間に入り、つなぎをしている。産後うつが心配される養育者については、一時預かり事業や横浜子育てサポートシステム、産前産後ヘルパー派遣事業等につなぎ、養育者の育児負担軽減を図ってきた。特に令和3年度からは、拠点での一時預かり事業がスタートしたことにより、相談支援につなぎやすくなり、連携して支援を行なうことができた。

②定例会や利用者支援定例会にて、相談対応の共有・振り返りを行い、適宜助言や情報提供を行っている。必要な際は、保健師につなぎ、継続支援を実施した。日頃相談を受ける拠点職員向けに、子どもの発達等の相談に必要な知識について、研修を実施した。今後もお互いの役割を理解し、支援のスキルアップため、事例検討を行い、区役所と拠点の連携を深めていく。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・ コロナ禍では相談問合せメール相談も開設したことで選択肢が増えた。開館時間以外にもアクセスでき、利用者が選べる相談ツールの選択肢を増やすことができた。
- ・ 一時預かり利用の予約の際には、丁寧に養育者の意向を聞き取り、相談支援につなげることができた。特に緊急の対応を必要とする養育者の相談に対して、速やかに一時預かりの利用を促すことができ、多機能を活用した支援につなげることができた。

(課題)

- ・ コロナ禍で過ごしている子どもの発達への影響について、今後どのように取り組んでいくか、区役所が把握している状況も踏まえ検討していく必要がある。
- ・ 父親（パートナー）の意向を聴きながら、子育てに向かうための環境づくりや日常感じていること等を発信できる場づくりにこれからも力を入れていく。
- ・ 養育者の多様な相談ニーズに対応をしていくにあたり、区役所と連携しながら、医療機関や専門機関等の情報を把握していく。また、相談のスキルアップのため、事例検討や研修を実施していく。

振り返りの視点

ア 養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

イ どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。

ウ 相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。

エ 区こども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っているか。

オ 専門的対応が必要と考えられる相談について、区こども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。

カ 関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

3 情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	・ココアプリの安定運用 ・効果測定、機能の充実検討 ・情報発信ツール(アプリや紙媒体)を効果的に使うための利用ニーズの把握(主に情報アクセスの状況)に、更なる工夫が必要なこと。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		B	A
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

ココアプリ実績	R1(H31)	R2	R3	
ココアプリ登録	4,400	4,500	4,680	延べダウンロード数
情報配信数	1,109	712	961	配信している情報の年総数
プッシュ通知数	1,800	2,160	2,580	プッシュ通知数平均数
通知日	約15,600	約8,900	約6,600	毎週木曜の通知日に閲覧されているページ数

R3登録数等				
支援メールニュース登録数	141		どろっぶ	サテライト
HPアクセス数(PV)	248,396	Instagram フォロワー	1,148	1,037
(ページ訪問数)	44,795	Twitter フォロワー数	226	253
あっとどろっぶ季刊紙 年2回	3000部 /50か所	Twitter ツイート数	627	607

情報ツール一覧	
1. HP	カレンダーや初回利用者の方に向けた発信、事業内容の周知。
2. ココアプリ	地域イベント情報の発信、ネットワークを活用した情報発信
3. Instagram	地域訪問報告、ひろばの様子(ブログからの住み替え)、イベントの告知、ひととき類かりの空き状況
4. Twitter	館内の混雑状況、臨時休館などのみ発信
5. メールングリスト	monaka/MOMOへのお知らせ 支援メール配信
6. LINE公式	monaka/MOMOへのお知らせ 子育て支援者向けメールニュース(名称変更予定)
7. note(新規試行中)	法人からのお知らせ(行政に関すること※)、全国の情報 どろっぶからのお知らせ(※)の抜粋版、地域の情報

※monaka/MOMO 利用者の自主ボランティア活動グループ

1 コロナ禍での柔軟な情報提供や情報共有

*ココアプリを活用して、急な開催変更・中止などを含めた情報を柔軟に、広く区民に届けることができた。変更情報の提供があることで、区内の開催状況などを迅速に把握することができた。コロナ禍でも、継続した関係性があったため、地域の方々から直近の状況とともにオンラインの活用や予約制の申込み方法の相談などが寄せられた。
*緊急事態宣言前後は地域イベント開催状況一覧表の発行も行い、主任児童委員や区内関係機関と情報共有を図ることで、運営側の想いととも実態把握をすることができた。

2 オンラインを活用して来館に変わるつながりを継続

*ひろばの臨時休館やプログラムの中止期間も、親子のニーズなどに応じて、各種プログラム等をオンラインで開催することで、交流できる場を創ることができた。
*特に両親教室は、妊婦が外出を敬遠する状況だったため、オンライン化を早急に対応した。参加者からも、周囲に同じ仲間がいることへの安心感の声が挙がるなど、不安軽減にも効果が得られた。引越前や里帰り中などの状況や外出が不安な方などオンラインだからこそ参加できた方もいた。自宅安静や入院中、夫婦別端末からの参加、多様な時間帯での開催など、コロナ終息後も併用していく良さを感じることができた。
*横浜子育てサポートシステムの入会説明会、予定者研修をオンライン開催したことで、来館しづらい層にも利用につなげることができた。
*各種会議もオンラインを活用することで、「ぎゅっと」(港北区子育て支援ネットワーク)、関係機関、拠点間でも会議や打合せ等を行うことができた。コロナ禍で増えたオンライン研修も積極的に受講することで、職員のスキルアップ

様式1-3 地域子育て支援拠点事業評価シート

プにもつながった。

3 多様な情報発信

* ホームページの2度目の改訂を実施。利用者でありデザイナーとして地域で活動している方に依頼し、地域企業の協力でより見やすくアクセスしやすい構造のホームページを作ることができた。

* Instagram（プログラム・ひろば紹介）やTwitter（混雑・開館状況）を場面に応じて活用し、利用しやすい形態を選択できるよう、より多くの人に情報が届きやすくなる工夫を行った。

* 全プログラムのオンライン申込みができるように設定したことで、開館時間以外の時間帯や新規利用者のアクセスにつながった。

* 紙媒体を削減し（「あっとどろっぶ」の季刊誌化など）、ニーズに合わせてWEB媒体に移行することで、多様な層に情報を届けることができた。紙媒体が必要な層に対しては、状況に応じ検討を重ねていく。

4 ココアプリをきっかけとした情報発信の活性化

* ココアプリの改訂が進み、情報提供側が直接投稿できるフォームが完成したことで、情報発信の利便性ととも、多様な団体からの情報が随時届くようになり配信内容がより豊かになった。

* オンライン会議を活用し、コロナ禍でも編集会議を止めることなく、定期的に子育て支援に関わる多様な方と情報交換をする場を持つことができた。

* ココアプリの他区展開で、戸塚区で「とっとの芽アプリ」ができた。

* 18区拠点での情報担当スタッフが定期的集まり、情報共有部（ネットワーク）が発足し、市域での情報発信の共有などを図ることができた。

評価の理由(区)

①②乳幼児健康診査、赤ちゃん会、子育て支援者会場、こんにちは赤ちゃん訪問、家庭訪問、母子健康手帳交付面接等で地域子育て支援拠点の情報提供機能について積極的に周知している。拠点のホームページが変更となり利用者目線で見やすくなり、ココアプリとともに地域子育て支援拠点の案内時に利用をすすめている。月1回のココアプリの編集会議に参加し子育て支援にかかわる関係者で集まり、情報の集約の場となっている。特に、子育てサークルや主任児童委員の実施するサロン等の活動については、情報発信について引き続き支援できると良い。SNSの運用についてはルールを定め、適切に活用できるように支援していく。

③こんにちは赤ちゃん訪問員を通して、地域子育て支援拠点を紹介し、来館につながっている。対面での情報発信も大切なため、引き続きこんにちは赤ちゃん訪問員や子育て支援者等の担い手に紹介してもらえよう、拠点事業の共有を図っていく。また、こうほくnetほいっぷ（区内ひろばから選出された子育て当事者グループ）が作成した拠点の紹介動画を両親教室で流すことで、活躍の場の提供をしている。子育て支援者向けのアンケートより、子育て情報の発信や子育て支援にかかわる支援者のネットワークづくりを拠点と一緒に取り組みたいという回答が多くあり、養育者や担い手が情報収集・提供にかかわるような仕組みを検討していく必要がある。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・コロナ禍での感染状況を鑑みながら、利用者・担い手に向けた情報発信のオンライン化を推進したことで、来館しづらい層に向けても利用につなげることができた。
- ・SNSによる情報発信の強化、コロナ禍での情報収集の手段としてココアプリによる開催変更SNSを活用することで、区民に向けて即時的な対応をすることができた。
- ・ココアプリの安定的な運用により、区内の様々な子育て情報を幅広く提供できた。
- ・地域子育て支援拠点利用者のスキルや意向を取り入れながら、ホームページの大幅な改訂をしたことで、スマートフォンでも見やすいデザインにした。見やすくなったことでアクセス数や問合せも増えた。

(課題)

- ・多様化した情報（紙媒体、他ツールなど）の実態把握と子育て家庭に届ける情報の一元化を目指し、情報発信の整理をしていく。
- ・すでに発信している情報について、更に利用しやすい形態や現状に合わせた更新、バージョンアップが必要。様々なスキームを活用し、子育て層が必要としている情報のニーズ把握を実施していく。
- ・引き続き、地域の担い手から養育者へ情報提供していくために、地域子育て支援拠点の事業内容や区内子育て情報について、SNSを併用しながら定期的に情報提供していく。

振り返りの視点

- ア 養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
- イ 来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
- ウ 利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
- エ さまざまな子育て支援の場に出向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
- オ 拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
- カ 養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
- キ 情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

4 ネットワーク事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	・幼稚園、保育園との連携については、共通の課題意識を持ち実働できるネットワークが未整備。 ・共通の地域福祉課題(担い手の人材不足等)について、各分野(子育て支援・保育・高齢・障害等)が横断的に解決に向けた検討や提案ができるプラットフォームが必要。	B	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		B	B

評価の理由(法人)

(主なデータ)

R2・3年度 ネットワーク会議、プログラム等のオンライン開催一覧			
名称	対象	内容	
ぎゅっと	港北区ひろば運営メンバー	区内7ひろば、2拠点の運営メンバーの情報交換	※)宣言等適用期間のみオンライン開催
ココアプリ編集会議	子育て支援に関わる方	アプリの編集会議に参加しているメンバーの情報交換会	
ななつから…	障がい児支援に関わる方	障がい児支援に関わるグループの保護者や支援者	宣言等適用期間のみオンライン開催
両親教室	プレパパ・プレママ	妊娠中の生活、参加者同士の交流	
両親教室振り返り	両親教室開催に関わる方	両親教室開催に関わる専門職の方、区内7ひろば、2拠点での振り返り	
大綱中学校ふれあい体験	大綱中学2年生全生徒	家庭科授業の一環として中学校とひろばをつなぎ交流等を行う	
横浜子育てサポートシステム(子サポ)入会説明会	子サポ利用・両方・提供会員	横浜子育てサポートシステム入会のための説明会	
横浜子育てサポートシステム(子サポ)予定者研修	子サポ両方・提供会員	横浜子育てサポートシステム両方・提供会員になるための研修	宣言等適用期間のみオンライン開催
ココサロン	子サポ両方・提供会員	フォローアップ講座	
バリアフリー基本構想意見募集会	ひろば利用者、地域の方	バリアフリー検討会に関するオンラインの意見募集会	
こうほくnetほいっぴ	ひろば利用者	各ひろばの利用者の代表が集まり情報交換	宣言等適用期間のみオンライン開催
助産師とみんなの知恵袋	未就学児親子	母乳のこと、子育てについて話せる場	宣言等適用期間のみオンライン開催
あつぷら	生後2か月~4か月児と保護者	初めての子育てがスタートしたばかりのママと赤ちゃんのプログラム	宣言等適用期間のみオンライン開催
あつぷら/離乳食おしゃべり会	0歳児と保護者	栄養士との離乳食について話せる場	
ちよこつと育児体験会	プレパパ・プレママ	保育園の先生から聞けるマタニティルーム	
出産準備プログラム	プレパパ・プレママ	妊娠中の生活、参加者同士の交流	宣言等適用期間のみオンライン開催
パパ講座	0~3歳児を持つ父親	オンラインで楽しむちよこつとゲームとパパトーク	宣言等適用期間のみオンライン開催
未就学児セミナー	主に未就学児保護者	支援級・支援学校に通う子の放課後や休日の過ごし方	
1歳前後の座談会	主に0・1歳児と保護者	0歳・1歳児の親子のプログラム	宣言等適用期間のみオンライン開催
オンラインひろば	ひろば利用者	通常ひろばとオンラインをつないでの情報交換	
のびのび月曜日	ひろば利用者	通常ひろばの利用が難しい親子の情報交換	R3年度は通常開催
太尾宮前まちづくり運営協議会定例会	地域・子育て関係者	地域・子育て支援関係者による定例の情報交換会	R3年度は通常開催

※)宣言等適用期間:新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言の発令期間、及びまん延防止等重点措置適用期間

R3年度 主なネットワーク実績			
主任児童委員連絡会	サークルリーダー会(4地区)	大倉山夢まちづくり協議会	網島ネットワーク会議
子育て支援者会議	施設間連携会議	太尾宮前まちづくり協議会定例会	高田地区ネットワーク会議
地域ケアプラザコーディネーター会議	保育施設等施設長会議	太尾つ子広場訪問	すくすくハウス訪問
自立支援協議会児童部会	公立園長会出席	たんぼぼきたにっば訪問	ひよっしー訪問
移動情報センター推進会議	公立保育園訪問(5園)	大倉山こどもフェスティバル実行委員会	はひふへほ訪問
しんよこはま地域活動ホーム運営委員会	大綱中学校触れ合い体験	小さなメリークリスマス(大倉山記念館)訪問	よしだっこ訪問
ぎゅっと会議	港北区小学校校長会 出席	太尾南公園花整備参加	暮らしの保健室訪問
障がい児グループ交流会	港北区中学校校長会 出席	おひさまたんけんたい 合同企画等	ココット訪問
わくわく子育て広場	小学校訪問(北網島、北網島特別支援、網島東)	つちのこプレイパーク 合同企画等	子育てサークル「きりんさんクラブ」訪問
港北区老人クラブ連合訪問	新横浜母と子の病院訪問	大倉山おへそ 合同イベント等	子育てサークル「ハローくらぶ」訪問
横浜ラポール訪問	横浜労災病院訪問	子育てサークル「ぞうさんの帽子」訪問	公園遊びの会わくわく訪問
トレッサの幼稚園保育園イベント・出張相談	よしかた産婦人科訪問	城郷小机サークル交流会訪問	網島公園こどもログハウスモッキー訪問
保育所分科会にて子育て支援拠点の取組発表	乳幼児一時預かりほけっと訪問	子育てサロン「篠原らっこ」訪問	
新横浜赤ちゃん会	生きがい就業支援スポット訪問	子育てサロン「しのはらんど」訪問	
鳥山町赤ちゃん会		子育てサロン「まめのき」訪問	
師岡赤ちゃん会		子育てサロン「師岡ドーナツ」訪問	
網島東赤ちゃん会		よしだっこ訪問	
網島西赤ちゃん会		ラ・ココロラ 訪問	
下田赤ちゃん会		わっとほーむ訪問	
日吉赤ちゃん会		公園遊び きくなびよんびよん訪問	
新吉田赤ちゃん会			

様式1-4 地域子育て支援拠点事業評価シート

1 支援者側の関係の保持とニーズ調査の充実とさらなる共有

- * コロナ禍で、活動実践者の情報交換やこの状況下でもできることを相互に模索するため、オンラインを駆使して各種ネットワークを絶やすことなく継続した。
- * 妊娠期支援については、年間60回の開催を多職種連携で協働実践し、参加者である妊娠期家庭を中心に据えて、コロナ禍でも中止にすることなく継続できたことは大きな成果である。
- * 「4か月児健診アンケート」結果を区と協働で、あらゆるネットワーク（親と子のつどいの広場や子育て支援者会議等）と共有の場を作ったことは、回収が一定期間の結果とはいえ、アンケート結果から読み解ける効果や成果から、親子のニーズや今後の取り組みの目指すべき方向（産後の家庭状況の把握から産前の支援の必要性）が明確になった。

2 区報掲載・セミナー開催を機に高まった当事者間のネットワーク

- * 「ななつから…」（障がい児サークル、地域訓練会等が集って情報交換による課題解決を継続してきたネットワーク）が、区の働きかけによって、広報よこはま港北区報での見開きの団体紹介枠を持てたことで、それぞれの団体・ネットワークとして大事にしたいこと等の理念を相互理解し、紙面づくりができた。その結果、団体活動の意義や価値を区民に届けることができた。
- * 区民（主に障がい児を持つ家庭）を対象に、「ななつから…」主催のオンラインセミナー・勉強会が開催され、参加者だけでなく関係機関からの関心が高まり、障がい児家庭の現状を共有することができた。

3 保育園、小中学校との連携継続とさらなる拡充への見通し

- * 公立保育園園長会への継続的な参加により、産後のプログラム「あっぷっぷ」等を保育園で実践することについて検討を続けた。区社協所管の保育所分科会では、『地域子育て支援の今』を拠点側からレクチャーし共有する場を持つことで、子育て家庭の現状や支援体制についての理解を深めることができた。
- * 小中学校と実施してきた「ふれあい体験」は、一部オンラインで試行。オンラインでも互いの状況理解や交流のきっかけづくりとなっていたため、確実に次につながる手応えを得ることができた。

4 団体支援を通じた多世代からの応援によるネットワークの拡がり

- * 「宮前まちづくり協議会」（大倉山地区）ではオンライン会議を行い、つながりの継続を図った。「綱島子育てネットワーク会議」（綱島地区）では地域情報一覧を作成し、幼稚園・保育園にも共有した。
- * 2年間開催できなかった地域交流イベントについては、人数の分散に配慮しながら、両拠点内で開催した。日頃から協力いただいている関係性やネットワークを活かすことができ、利用者親子と地域の方との接点や融合の場を再開することができた。
- * 港北区老人クラブ連合会が定期的に拠点やひろば利用の子どもへのお土産を折り紙で作成してくれたことで、間接的ではあるが、異世代交流にもつながった。
- * 各種地域イベントの再開に向けてのサポートなど、地域の中のつながりの継承や子どものために取組みたい、という想いを貴重な人材として、ネットワークや情報発信機能を活かして多面的に応援してこられたのは成果である。

評価の理由(区)

- ①「ぎゅっと」（港北区子育て支援ネットワーク）では、妊娠期からの切れ目のない支援を地域展開していくために、親と子のつどいの広場と共に現状把握、課題認識の共有を図った。妊娠後期に配布する新たな資料を拠点と共に作成し、拠点の妊娠期プログラムへのタイムリーな周知を図った。
幼稚園、保育園との連携については、ネットワーク・連携強化を引き続き実施していく。
- ②利用者を身近な地域の間につなげられるよう、定例会や母子保健コーディネーターとの共有会等で情報を共有している。「とらのまき（港北区内子育て情報のパンフレット）」や地域子育て支援拠点のリーフレットを活用し、地区担当保健師が地域活動、個別支援の中で子育て支援の場につないでいる。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・地域子育て支援拠点で実施していたプログラムを障害者スポーツ文化センター横浜ラポール、公立保育園、地区センターと連携して実施することにより、子育て家庭の課題を関係機関と共有することができ、拠点から離れた地域のより多くの養育者を子育て支援の場につなぐことができた。
- ・「ぎゅっと」ネットワーク会議を年3回開催し、子育て支援の現状や課題を共有し、特に妊娠期から場につながる仕組みづくりや迎え入れについての取り組みに注力できたことで、コロナ禍で里帰りできず、周囲に知り合いがいない等の家庭の頼れる先としても寄与した。
- ・「4か月児健診アンケート」の結果を関係機関や支援関係者と共有した。アンケート結果から、現状課題を踏まえた今後の取り組みの目指すべき方向が明確になり、ひろばプログラム等にもつなげることができた。
- ・コロナ禍において、対面での会議、プログラム等が中止になる中で、オンラインで実施することにより、ネットワークでの取り組みを継続できたことで、コロナ禍での親子の現状の共有とともに、再開に向けての準備を進めることができた。

(課題)

- ・幼稚園や保育園、医療機関などとの連携をどう再開するか、情報共有の場と併せて取り組みを検討していく。
- ・オンラインでつながった養育者を地域の場につないでいくことを引き続き丁寧に行っていくための仕組みづくりが必要。
- ・蓄積してきたネットワークごとのニーズや地域課題を見える化し整理する。課題解決に向けてはネットワーク間で地域課題を共有するとともに、新たなネットワークを構築する等、横断的に取り組んでいく。

振り返りの視点

ア 子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。

イ 地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしているか。

ウ 地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。

エ 養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。

オ 子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

5 人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	(参考)3期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができています。	・地域福祉の課題として一体となって取り組むべき人材育成について、区関係機関全体での情報共有や連携が不足している。 ・企業連携や育成ツールなどの抜本的見直しや大胆かつユニークな試みが求められている。	B	B
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		C	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		B	B

評価の理由(法人)

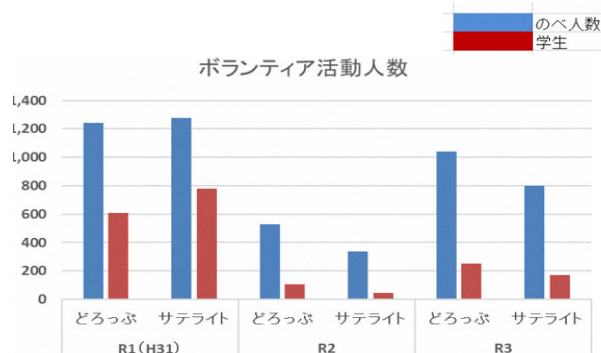
(主なデータ)

	R1(H31)		R2		R3	
	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト
ボランティアのべ活動人数(人)	1,242	1,275	528	337	1,039	801
内)学生を含むボランティアの人数(人)	609	777	103	46	249	172

	R1(H31)		R2		R3	
	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト
「おんぶにだっこ」のべ登録者数	76		91		105	
「おんぶにだっこ」のべ活動実績	92	104	15	54	66	94

ボランティア希望メール受信数

	R1(H31)	R2	R3
	—	34	37



1 地域活動に関心を寄せる層の活動の場へのつなぎと可視化

*働き方や利用者ニーズが多様化したことで、ボランティア希望者が増えてきたことを受け、拠点内の活動内容を一元化したリーフレット「DOORS」を作成した。活動周知とともに、希望者の意向を丁寧に聞き取り、常に拠点内の活動につなげたり、横浜市道路局主催、区政推進課主催の「バリアフリー検討協議会」への参加など、利用者を地域活動にもつなげた。(年間延べ1,840名がボランティアとして活動)

2 子育て当事者による次世代のための活動機会の伴走支援

*妊娠期事業がコロナ禍で中止や縮小開催となったことを受け、父親間の自主グループによるメッセージ動画を作成した。「こうほくnetほいっふ」(区内各ひろばから選出された子育て当事者グループ)が、親と子のつどいの広場の紹介原稿や災害時に必要な情報一覧を利用者を巻き込みながら発行することで、ひろば利用者の関心や意欲が高まった。

*障がい児グループ支援「ななつから…」が主体となり、就学や放課後の過ごしについてのオンラインセミナーを開催した(参加者約200名)。自立支援協議会や区内小学校等への働きかけ、連絡調整等を行ったことで、官民の協働による場を地域の中で創ることができた。

様式1-5 地域子育て支援拠点事業評価シート

3 次世代につなげるためのカタチを変えた体験の伝承

* 港北区社会福祉協議会との10年間に及ぶ学生のボランティア体験事業の実施がコロナ禍では難しい状況となったが、拠点としては学生の活動を継続実施、受け入れ先の保育園や子育てサロン等にも働きかけ、人数を制限した活動やオリエンテーションをオンライン化するなどして実現させた。

* 地域の市立中学校とは、家庭科の授業を活用し、2年生の全クラスが、拠点のひろばとオンラインをつなぎ交流したり、近隣の市立高等学校とは、他区との協働でふれあい体験授業のプログラムを組立て、家庭科の講師として参画したことで、学生の子育てへの関心を高めるなど、次世代に向けた人材育成を積極的に実施した。

4 子育て支援に関心を寄せる層への理解促進と活動意義の共有

* 拠点内で活動している保育者グループ「おんぶにだっこ」、横浜子育てサポートシステム提供会員等に向けて、オンラインで研修会を実施した。区と協働実施している「4か月児健診アンケート」の結果を共有することで、産後間もない家庭の現状課題を理解するとともに、それぞれに関わっている活動についての経験談を伝え合うことで、子育て家庭を応援していく活動意義を再確認する機会を創った。

* 子育て家庭や関係機関から、特別支援教育支援員やこんには赤ちゃん訪問員等が不足していることで声掛け依頼の相談があった。子育て家庭からの個別ニーズや機関としての現状課題を伝えつつ、迅速、かつ柔軟に働きかけを行ったことで、担い手として活躍する層につながられた。

5 子育て支援に関係の薄い層に対しての働きかけと実働へのつなぎ

* 港北区老人クラブ連合会とも連携し、婦人部が中心に作成した手作りおもちゃをひろば利用者のお土産として活用したり、「子育て応援隊」缶バッジの普及啓発活動を促進することができた。こうしたツールのやりとりによる交流から実働的な対面交流については、感染状況をみつつこれからの課題である。

※「子育て応援隊」こうほくnetほいっぶから独立した自主グループ

* 神奈川法人会綱島東支部との情報交換や子育て家庭の現状を発信することで、社会貢献を考える地元企業とも連携してイベント企画をしたり、拠点行事の際には利用者やボランティアとの交流を通じて、子育て分野への関心を高める機会や活動にも注力した。

評価の理由(区)

①身近な地域での子育て支援の場となっている「ぎゅっと」（港北区子育て支援ネットワーク）にて、妊娠期の取り組み等、意見交換を実施し、担い手の活動を支援している。子育て支援者や子育てパートナーとともに、サークル支援を実施している。また、拠点で育成された人材の活躍の場を提供できるように、定例会で意見交換している。

②定例会でボランティアの活用や人材発掘に関する意見交換を行っている。新たな担い手を子育て支援活動につなげるきっかけづくりまでは十分できていない。今後、横浜子育てサポートシステムの提供会員の増加が図れるように、取り組んでいきたい。今回の事業評価で実施したアンケートにおいて、「子育てが落ち着いたら、ボランティア活動を考えたい」と答えた方が半数程度いたことから、担い手として参加するきっかけづくりを拠点とともに積極的にしていきたい。

③広報にて子育て家庭の理解を深める啓発を実施している。新たな担い手を子育て支援活動につなげられるように、広報していきたい。

④区役所・拠点・地域ケアプラザでの両親教室の実施や親と子のつどいの広場にて、これから子育てをするプレパパ・プレママ向けに身近な地域で妊娠期からの支援を実施している。また、オンラインでの事業実施を行うことで、コロナ禍においても、支援を継続できている。これから親になる世代に向けて、学校でのふれあい体験事業を拠点が継続実施できるように、学校との連携が図れるように、支援している。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・港北区の広報に地域訓練会や障害児サークルの活動を掲載することで、広く区民に活動周知をすることができた。記事を作成するプロセスにおいて、お互いの活動の理念や工夫を共有できた。その結果、就学や放課後の居場所、過ごし方の情報発信をする場づくりなど、更に活動を発展していくことができた。
- ・コロナ禍で地域への関心の高まりもあり、地域子育て支援拠点に対してのボランティア希望が増えた。散見していたボランティア活動種別を一元化して情報提供するためのツールを作成した。その際には、利用者のスキルや提案を生かし、編集や構成なども共に考えて作成し、幅広い年齢層に案内できるツールとして活用できた。

(課題)

- ・新たな担い手の活躍の場へのつなぎについて、関係機関と連携できる仕組みを検討していく。
- ・高齢者・障害者支援の分野についても、不足している人材については、区社会福祉協議会や地域ケアプラザ等の関係機関と協働でボランティア育成の研修の場を設ける等検討していきたい。
- ・子育て当事者が利用者から担い手として活躍できるよう、引き続き共助の意識を醸成しつつ、活動につなげていく。

振り返りの視点

- ア 子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
- イ 地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
- ウ 新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
- エ 活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
- オ 養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
- カ 地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
- キ 子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
- ク 子育て家庭(妊娠期の方を含む)を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
- ケ これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

6 横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	(参考)2期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・障害福祉サービスや放課後児童育成事業が利用できず困っている障がい児のサポート等を、子育てサポートシステムによる預かりで対応しているケースもある。子育てサポートシステムに頼らざるを得ない現状を踏まえて、制度間の問題点を提起していく必要がある。 ・会員の膨大な利用データがあるにもかかわらず、今後の制度改善などへの分析や活用が未整備。提供会員の継続性などの把握を進めていく必要がある。 ・事由を問わず、回数制限なく利用できるものではあるが、「地域ぐるみの子育て支援」の趣旨を踏まえて、市全体での利用基準検討の場が必要と感じる。	B	B
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		B	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		B	B
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

会員数(人)	R1(H31)	R2	R3
利用会員	2,205	2,236	2,333
提供会員	255	260	256
両方会員	136	121	127
合計(年間)	2,596	2,617	2,716

web更新伸び率	利用	提供	両方	合計
令和2年度	156	4	5	165
令和3年度	1,502	175	91	1,768
伸び率(倍)	9.6	43.8	18.2	10.7

	R1(H31)	R2	R3
入会説明会(回)	209(内サテライト35)	290(内サテライト57)	209(内サテライト44)
参加者人数(人)	977	829	666
個別説明(件)	160(内サテライト41)	201(内サテライト77)	95(内サテライト49)
出張説明	114人/10回	85人/11回	95人/19回
コーディネーター数(件)	891(内サテライト受付23)	853(内サテライト63)	754(内サテライト127)
(ひととき預かり)	(235)	(376)	(-)
事前打合せ(件)	466	389	492

コーディネーター件数(件)	(R3年度実績)	
	年間合計	平均/月
キャンセル数	156	13
調整数	1,929	161
コーディネーター数	754	63

活動件数(件)	(R3年度実績)	
	年間合計	平均/月
	9,245	770

更新ハガキ	(R3年度実績)			
	利用	提供	両方	合計
ハガキ郵送数	2,175	263	125	2,563
発送後:更新状況	1,695	214	113	2,022

様式1-6 地域子育て支援拠点事業評価シート

1 一時預かり事業「ひととき預かり」スタートへのかけはし

* 提供会員資格のあるひろばサポーターを配置し、急なひろば預かりにも対応をすることで、ひろばでの預かりのニーズを顕在化させ、親子にとって気軽にリフレッシュができるひろばでの預かりの事業化を実現した。

* ひととき預かりの事業を通じ、当日の急な預かりにも対応できるようになった。入会説明会を預かり時に個別に実施するなど、迅速かつ柔軟な対応をすることで、利用者にとってより使いやすい事業となっている。

2 多様なニーズに柔軟に対応

* 休園になった保護者からの依頼等も多く、提供会員から相談を受けることも多かったが、コロナ禍での子どもとの関わりや感染症対策等について、コーディネーターと一緒に考えたり助言したりすることで、活動を中止することなく継続してくれた方が多かった。

* 休館中の電話問合せも多く、コーディネート依頼に加え、自粛生活での育児不安や家族との関係等気持ちの受け止めが必要な場面も多かった。子育てパートナーとも連携しながら傾聴することで、コロナ禍でもつながれている安心感や不安の軽減につながった。

* 行政や地域の方（民生委員・児童委員など）から、就園就学に向けた制度や利用方法等の個別相談が増えているが、丁寧に事業説明をすることで、支援関係者の事業理解にもつながっている。

* 里帰り出産が難しい状況の中で、産前産後の家庭の預かりニーズやきょうだい児の園への送迎等が増加しているが、個別に対応していくことで安心感につながっている。

3 提供会員増員に向けての取組の継続

* 令和2年度の予定者研修はオンラインを活用し、どろっぶ・サテライトの2会場をつないで開催した。コロナ禍でも預かることへの関心が高まった提供会員への登録希望もあり、30名の方が受講できたことで、子育て家庭の現状の共有とともに担い手を増やすことができた。

* 令和3年度の予定者研修は、地元の企業の協力で広い会場を借りることができ、開催を継続することができたことで、多様な子育てニーズにも対応することができた。

4 システム移行に向けた新しい挑戦

* 本部事務局の業務が区支部に移管したことをきっかけに、会員と直接連絡できるようになったことで、より迅速、かつ柔軟な対応ができるようになった。

* 年度更新の案内を封書から葉書に変更しWEB更新を推進したことで、令和3年度の更新率は増加した。また、出張説明会の開催については、地域の公共施設を借りて開催することが困難な中で、オンラインの入会説明会に取り組んだことで、来館しづらい層や産後間もない家庭等も参加できる場を創ることができた。

* 入会説明会の申込みを電話受付からWEB申込みに切り替えたことで、開館時間以外の時間帯の申込が増え、多様な層が参加することができた。

* 預かりニーズの高いサテライトにも常勤1名が配置されたことで、入会説明会や個別説明、問合せ等についても即時的な対応ができるようになった。

評価の理由(区)

- ①利用会員の需要が高く、広報紙や小中学校の保護者向けに案内するなど提供会員数拡大のためさらなる周知が必要である。利用が終了した利用会員にはその後提供会員へなっただけよう積極的に声をかけていただいている。
- ②母子健康手帳交付時面接、乳幼児健康診査、訪問等で必要な方には周知した。常勤コーディネーターが1名加配となり、専門的対応が必要と考えられる相談や手続きが難しい方は子育てパートナーへつなぎ個別に対応を依頼した。子育て世帯向けアンケートで「知っているが利用していない」という回答の中では、利用までに手間がかかる、利用方法がわからないという意見もあり、対面の説明会へ参加が難しい場合は、オンライン説明会があることも案内の時に伝えた。
- ③提供会員の研修会の講師をつとめ、「地域ぐるみの子育て支援」となるよう横浜子育てサポートシステムの説明をし理解を求めた。個人情報取り扱いや事故予防のため、提供会員向けのフォロー研修にも力を入れて行く必要がある。
- ④横浜子育てサポートシステムの利用をとおして、拠点の他の事業の紹介をしたり、横浜子育てパートナーを通じて地区担当保健師につないだり、必要な支援につなげている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・横浜子育てサポートシステムのスキームを使って試行していた一時預かり（ひととき預かり）が、拠点一時預かり事業として正式に実施できた。親子のニーズから当日の急な預かりにも対応できる仕組みづくりができ、拠点の多機能化が図られた。
- ・コロナ禍においても事業を継続し、育児不安を抱える家庭に個別対応のサポートができた。提供会員側を増やす取り組みとして、各種研修などもオンライン化をはかり、学びの機会を継続できたことで、意欲関心のある方を子育て家庭を支える担い手としてつなげることができた。
- ・会員に対する年度更新の手続きの簡便化を試み、またその効果測定をしっかりと行ったことで、会員の継続が増加した。

(課題)

- ・配慮が必要な養育者に対して、子育てパートナーや区保健師と連携しながら対応することが増えてきた。関わるスタッフのスキルアップとしての研修機会の場が不足している。
- ・経年の課題でもある提供会員の不足、利用会員数とのアンバランスな状況。特に20歳代からの提供会員登録のアプローチを検討していく。増大、多様化するニーズにどのように対応していくのか、制度の見直し、整理も視野に入れ、検討を進めていく。
- ・起こりうる事故を想定してのコーディネート時の会員に対する留意事項の徹底、周知をより強化し、事故防止になお一層努めていく。

振り返りの視点

- ア 区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
- イ 提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
- ウ 養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
- エ 会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができていないか。
- オ 会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
- カ 提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
- キ 会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
- ク 就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
- ケ 会員間で授受される個人情報を会員が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
- コ 援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
- サ 専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
- シ 子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができていないか。

7 利用者支援事業

目指す拠点の姿	(参考)1期目振り返りの課題	自己評価(A~D)	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・地域で親子を一緒に見守っていく中で、支援関係者との成功事例を作り、事業の活用や周知につなげていくことが必要。 ・拠点から離れた地域での事業促進と地域への更なるつながりが必要。 ・相談当初からの子どもの年齢があがってくることで、関係機関等との更なる連携が必要となる。	B	B
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		B	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		B	A

評価の理由(法人)

(主なデータ)

◆ 横浜子育てパートナー相談実績

	R1 (H31)		R2		R3	
	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト
電話	114	134	161	163	99	148
面接	109	238	130	223	152	305
出張	16	76	8	25	24	68
その他	23	2	75	45	37	35
合計(年間)	262	450	374	456	312	556

	R2		R3	
	どろっぶ	サテライト	どろっぶ	サテライト
配布回数	10	-	12	12
延べ配布数	28	-	115	43

◆ 一時預かり事業実績

どろっぶ(R3.6.30~) サテライト(R3.7.29~)

問い合わせ件数	どろっぶ	サテライト
ひろば	413	715
電話・その他	858	682
web予約(11月~)	736	793
合計	2,007	2,190

延べ預かり児童数		
	どろっぶ	サテライト
0歳	350	418
1歳	412	349
2歳	168	172
3歳	60	74
4歳以上	70	20
年間合計	1,060	1,033

預かり理由	どろっぶ	サテライト
通院	108	116
兄弟児の用事/学校行事	46	37
就労	131	36
リフレッシュ	452	535
家事	170	166
就職活動/勉強	60	54
介護・看護	5	0
その他	88	89

拠点他事業との連携	どろっぶ	サテライト
子育てサポートシステム	44	56
ひろば	304	242
相談・その他	17	91
合計	365	389

1 一時預かり事業(ひととき預かり)による支援の重層化

*一時預かり事業(ひととき預かり)については、子育てパートナーが預かりの主訴や背景などを丁寧に聴くとともに、一時預かり事業と横浜子育てサポートシステム事業との連携により、連続性ある預かりが実施できた。また、申込のシステム化を行い、利用者の利便性を図るとともに、拠点の多機能化が進んだことで、重層的な支援体制を整えることができた。

*預かりニーズに対しての受け入れ枠が少ない中、一時預かりのコーディネーターが丁寧に主訴を傾聴できたことで、子育てパートナーとも共有しつつ預かりにつなげることができた。

*子育てパートナーの相談や関係機関からつながった方については、必要に応じて受け入れ対応したことで、親子の背景を捉えることができた。

*拠点の一時預かり事業がスタートする際に、乳幼児一時預かり事業各所を訪問し双方の現状を把握しあったことで、以後情報提供しやすい環境づくりを構築することができた。

2 拠点における事業周知と拠点と接点のない層へのアプローチ

*子育てパートナーの所在については、ひろば内に掲示し可視化することで、子育てパートナーの周知につながり、アクセスしやすい仕組みを工夫した。

*拠点から離れた商業施設で出張相談を実施した。日常的に利用している施設で気軽に相談できる環境づくりや、拠点や相談機能のことを知らない層への周知にもつながり、継続利用する方もいた。

*妊娠期からの切れ目のない支援を目指し、妊娠中から拠点や子育てパートナーの事業理解を深めるために地域の産院を定期的に訪問したことで、広報周知や連携体制の構築にもつながった。

様式1-7 地域子育て支援拠点事業評価シート

* コロナ禍での拠点休館時でも、子育てパートナーの相談は継続しメールでの受付対応を新規に取り入れ必要に応じてひろばでの相談対応も行った。継続して相談対応していた方などへ手紙を発送したことで、その後の連絡や来館にもつながった。

3 主体性に応じた相談体制の環境づくり、支援窓口へ仲介しやすい関係性の構築

* 個別相談では、丁寧な寄り添いや傾聴とともに、相談者自らが課題を整理し自己決定していけるような支援を心がけた。
* 主訴に応じた座談会を即座に実施したことで、相談員と相談者の双方向だけではなく、当事者同士で話すことで多面的な考えに触れたり、同じ仲間がいるということに気づき自己解決に導くことができた。

* 専門的な相談先へつなぎやすい工夫として、関係機関を訪問し、情報交換、関係構築に努めことで、多様なニーズに応じた専門職との協働で相談の場を創ることができた（ダブルケアカフェ、ハローワーク、横浜型医療的ケア児・者等コーディネーター、面会交流支援団体など）。

* 拠点内の相談、臨床心理士個別相談、子育てパートナーの相談において包括的に捉えられるよう、日々の振り返りを丁寧に実施するとともに、個別相談カンファレンスでは見立ての検証、対応方針まで検討し支援につなげた。また、専門的な分野において子育てパートナー自身のスキルアップのために研修を積極的に受講し、相談の場での学びと実践につなげた。

4 利用者支援事業としてのネットワークの強化と新たなつながりへの試み

* 子育て世代包括支援センター機能の充実を図るため、母子保健コーディネーターとの定例会を実施し、相互の役割を確認した。話し合いを重ね、妊娠8か月に送付する手紙を作成し配布した。保育・教育コンサルジュとの連携を図り、振り返りの視点を共有することで、継続したひろばでの見守りができた。

* 資源が不足している地域への資源開発のために、関係機関を訪問し、現状のヒアリングをしながら課題共有をした。多職種での連携のもと、新たな資源創出に向けて動き出している。

* 子育て支援者と連携をし、サークル活動の周知協力を行い、子育て家庭と一緒にサークル訪問等もしたことで、地域活動につなげることができた。

* ひとり親家庭への配食支援を通じて配食希望者への呼びかけ（キッズクラブ等）や、物資提供依頼（フードバンク等）への働きかけをすることで、新たなネットワーク構築に至った。

* 産前産後の切れ目のない支援を実施していくため、「4か月児健診アンケート」を実施した。継続実施することで、コロナ禍ならではの課題を把握することができた。また、アンケート結果を「ぎゅっと」や、主任児童委員連絡会等で報告するなど、子育て家庭の現状と一緒に把握し、考える場を創ることができた。

評価の理由(区)

①産後の支援の情報提供等、妊娠期から地域子育て拠点等につながるように、妊娠8か月の手紙を送付する取り組みを、母子保健コーディネーターと子育てパートナーと一緒に検討し作成した。

令和4年度は、横浜子育てパートナーについて区広報に掲載し区民全体への周知を図っていく。

一時預かり事業の要綱、事業内容、懸念事項を協議し、円滑に事業開始できるようにサポートした。乳幼児健康診査時や個別支援の中で周知を積極的に行った。

②月1回の定例会、母子保健コーディネーターとの情報共有会時に相談者の対応を振り返り、相互の役割確認を行った。地区担当保健師と個別の支援の中で、情報共有や支援方針の確認を随時行っている。

③赤ちゃん会や公立保育園等の関係機関との会議・定例会の中で、横浜子育てパートナーの参加ができるように調整した。区内の子育てひろば、商業施設、地域ケアプラザ等に出向き、連携できるよう橋渡しをしている。

拠点事業としての成果と課題

(成果)

- ・「4か月児健診アンケート」での調査結果を踏まえて、母子保健コーディネーターや区保健師と協議しながら、妊娠8か月の家庭に郵送する手紙や母子手帳交付時に手渡す広報ツールを作成したことで、妊娠期家庭に向けた情報提供の機会を厚くすることができた。
- ・一時預かりの申込時に丁寧なインタビューを実施し、ニーズ把握に努めた。また区内乳幼児一時預かり事業施設を訪問し、情報共有したことで、一時預かり資源の実態把握とネットワークづくりができた。
- ・ひとり親家庭の配食支援の活動周知について、区内全キッズクラブに配布を行い、利用につながった家庭もあった。主任児童委員や地域ケアプラザと連携して、その家庭の身近な居場所で配食の利用を広げることができたエリアもあった。
- ・商業施設での出張相談により、拠点から離れているエリアに住む養育者や、子育て支援の場に来館しづらい養育者に情報提供や相談の機会ができた。
- ・産婦人科病院主催の両親教室などで、近隣区との連携のもと、拠点の案内や地域情報を伝達するための機会が定期的に設けられた。

(課題)

- ・横浜横浜子育てパートナーの名称および機能についての周知が子育て家庭に加え、支援関係者にもまだ不足している。
- ・一時預かり事業の利用枠に制限があり、状況に応じて施設全体で対応しているが、利用枠以上の申込ニーズがある。
- ・引き続き、関係機関や地域の社会資源とのさらなる関係強化を行い、支援につながるネットワークの継続を図っていく。

振り返りの視点

- ア 利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
- イ 養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
- ウ 最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
- エ 相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
- オ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介・支援依頼等について、相談者が円滑に利用できるような対応をしているか。
また、専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に紹介・仲介する等、適切な対応を行っているか。
- カ 拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら継続的な関わりをもっているか。
- キ 相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。
- ク 拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
- ケ 利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
- コ 把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。